

## アレルギー・リウマチ科

### 1. スタッフ（平成25年4月1日現在）

科 長（教 授） 簗田 清次  
 副 科 長（准 教 授） 岩本 雅弘  
 外来医長（学内講師） 釜田 康行  
 病棟医長（講 師） 永谷 勝也  
 医 員（教 授） 岡崎 仁昭  
 医 員（教 授） 吉尾 卓  
 医 員（准 教 授） 佐藤 健夫  
 医 員（講 師） 長嶋 孝夫  
 医 員（講 師） 秋山陽一郎  
 病院助教 丸山 暁人  
 シニアレジデント 6名

### 2. 診療科の特徴

当科の診療科名を平成12年4月1日をもってアレルギー膠原病科からアレルギー・リウマチ科へと変更した。患者によりわかりやすい名称とした。これにともないリウマチ患者の紹介数が増加している。

当科はアレルギー・リウマチ・その他の膠原病を専門にはするものの、同時に全身の管理能力も必要とされる。膠原病そのものがその疾患の特質上、多臓器に病変がおよぶこと、および中心となる治療法が免疫を抑制することから合併症として日和見感染をはじめとする感染症を引き起こす頻度が高いことが理由である。この全身管理能力は当科の最大の特徴であり、故にただ単に膠原病の診療にとどまらない。全身管理能力の習得という点は内科医としてもっとも重要なことであり、最大の武器でもある。この点はレジデント教育において、当科がもっとも力を注いでいるものでもあり、同時に附属病院全体の進むべき道でもある。

欧米に比べ約7年の遅れに甘んじていた我が国のリウマチ治療が、利用できる生物学的製剤の増加とともにいまや欧米なみとなった。現在までに当科で導入した生物学的製剤使用患者数は平成24年8月の段階で1022例に及ぶ。その80%以上の患者で非常に満足できる治療効果が得られており、これらの治療を受けた栃木県内の患者の43%に当科が関係している。地域医療に大きく貢献していると自負している。さらには臨床治験にも開発段階から積極的に関わり、より多くの治療困難症例のQOL改善に貢献した。

生物学的製剤による関節リウマチの治療には以前にも増して多くのマンパワーと時間を必要とする。生物学的製剤による治療を当科で多くの患者に実施できているのは県内各所の診療所との病診連携（栃木リウマチネットワーク）のたまものである。患者の紹介を受け、初期治

療を当科が中心になって行い、安定した段階で連携施設での治療へ移行する。しかし、大学附属病院の役割は緊急事態に備えることでもあることから当科でも数ヶ月に一度程度ではあるが併診を継続している。そのことで患者は診療所と大学という利便性と安全性の両面を確保できている。患者にも十分納得が得られ、また少ないマンパワーの当科においても、治療困難な重症例に注力することができた。この栃木リウマチネットワークには81施設（診療所）が参画している。

ジュニアレジデント教育に関しても力を注いでおり、他の内科では行っていない外来研修を取り入れている。新患をまずジュニアレジデントが診察し、患者の問題点、鑑別診断、検査計画などを短時間に把握させ、その後、教授が教育（mentoring）しながら患者を診察する方法である。入院患者の場合はすでに診断が下されている症例が多く、短時間に患者の有するさまざまな問題点を把握するという訓練を行うチャンスが少ないことを補う目的である。病棟での研修と外来研修はやり方が大きく異なる点も指導している。

平均在院日数の低減は昨年と同程度の達成率を得ることができており、長期にわたる入院でしばしば遭遇するQOLの低下を防ぐことができています。リウマチ膠原病は一般的には平均在院日数が多い診療科である。当科の平均在院日数である14～15日は全国レベルでも最も少ないレベルである。

#### ・認定施設

日本リウマチ学会教育施設  
 日本アレルギー学会教育施設

#### ・認定医

総合内科専門医	簗田 清次 岡崎 仁昭 岩本 雅弘 長嶋 孝夫
アレルギー学会指導医	簗田 清次 岡崎 仁昭 吉尾 卓
アレルギー学会専門医	簗田 清次 他4名
リウマチ学会指導医	簗田 清次 吉尾 卓 岩本 雅弘 長嶋 孝夫
リウマチ学会専門医	簗田 清次 他6名

### 3. 診療実績・クリニカルインディケータ

#### 1) 新患者数・再来患者数・紹介率

新患者数	732人
再来患者数	13,872人
紹介率	71.1%

#### 2) 入院患者数（病名別）

病名	患者数
関節リウマチ	178
全身性エリテマトーデス	67
強皮症・CREST症候群	38
シェーグレン症候群	30
血管炎症候群	33
多発性筋炎・皮膚筋炎	27
混合性結合組織病	13
リウマチ性多発筋痛症	11
成人Still病	9
ベーチェット病	4
アレルギー疾患	5
その他	72
合計（重複あり）	471

#### 3) 手術症例（緊急）病名別件数

慢性硬膜下血腫（脳神経外科） 1人

#### 4) 治療成績

#### 5) 合併症例

ICU入室症例 10人  
緊急入院率 140人/471人 (29.7%)

#### 6) 死亡症例・死因・剖検数・剖検率

肺炎 2人  
敗血症 3人  
間質性肺炎 2人  
肝不全 1人  
成人Still病 1人  
原因不明のショック 2人  
計11人（剖検2人、剖検率18.2%）

#### 7) 主な検査・処置・治療件数

（他科依頼含む）

腎生検 12件  
皮膚生検 22件  
筋・筋膜生検 15件  
口唇生検 9件  
側頭動脈生検 2件  
その他の生検 3件

#### 8) カンファランス症例

##### (1) 診療科内

3月9日 紅斑、CRP高値でステロイドが無効な関節リウマチ疑いの一例  
4月19日 肥厚性皮膚骨膜炎疑いの一例  
5月31日 ネフローゼ症候群を合併した成人発症Still病の一例  
6月14日 急性膝炎・黄疸を来たしたSLEの一例  
10月11日 タクロリムスによる薬剤性肺炎疑いの一例  
11月18日 家族性骨軟骨症疑いの一例  
12月13日 脊椎病変を伴ったSAPHO症候群の一例

##### (2) 獨協医大呼吸器・アレルギー内科との合同カンファレンス

5月15日 レフルノミドで加療中にGroup A Streptococcusによる体幹の壊死性筋膜炎を合併し救命しえた関節リウマチの一例  
10月19日 両下腿に巨大な潰瘍を認めANCA関連血管炎が疑われた一例

##### (3) 整形外科との合同カンファレンス

6月13日 手指関節の手術法  
12月5日 生物学的製剤の有効性比較

##### (4) 病棟看護師との合同カンファレンス

（病棟連絡会）隔月で行った。

1月23日  
3月26日  
5月28日  
7月30日  
9月24日  
11月26日

### 4. 事業計画・来年度の目標

レジデント教育の更なる充実と若いリウマチ医の育成が喫緊の課題である。

また、リウマチ患者教育をさらに発展させるため市民講座を平成19年から年に1～2回、市町村の公民館などを利用して行っている。平成24年度には10回目を迎えた。これをさらに充実させる。また、リウマチ友の会栃木支部との連携をより緊密にする。